道祖問答

芥川龍之介

天王寺（てんのうじ）の別当（べっとう）、道命阿闍梨（どうみょうあざり）は、ひとりそっと床をぬけ出すと、経机（きょうづくえ）の前へにじりよって、その上に乗っている法華経（ほけきょう）八の巻（まき）を灯（あかり）の下に繰りひろげた。

切り燈台の火は、花のような丁字（ちょうじ）をむすびながら、明（あかる）く螺鈿（らでん）の経机を照らしている。耳にはいるのは几帳（きちょう）の向うに横になっている和泉式部（いずみしきぶ）の寝息であろう。春の夜の曹司（ぞうし）はただしんかんと更け渡って、そのほかには鼠（ねずみ）の啼く声さえも聞えない。

阿闍梨（あざり）は、白地の錦の縁（ふち）をとった円座（わらふだ）の上に座をしめながら、式部の眼のさめるのを憚（はばか）るように、中音（ちゅうおん）で静かに法華経を誦（ず）しはじめた。

これが、この男の日頃からの習慣である。身は、傅の大納言藤原道綱の子と生れて、天台座主慈恵大僧正の弟子となったが、三業も修せず、五戒も持した事はない。いや寧ろ「天が下のいろごのみ」と云う、Dandy の階級に属するような、生活さえもつづけている。が、不思議にも、そう云う生活のあい間には、必ずひとり法華経を読誦する。しかも阿闍梨自身は、少しもそれを矛盾だと思っていないらしい。

現に今日、和泉式部を訪れたのも、験者として来たのでは、勿論ない。ただこの好女の数の多い情人の一人として春宵のつれづれを慰めるために忍んで来た。

――それが、まだ一番鶏も鳴かないのに、こっそり床をぬけ出して、酒臭い唇に、一切衆生皆成仏道の妙経を読誦しようとするのである。……

阿闍梨は褊衫の襟を正して、専念に経を読んだ。

それが、どのくらいつづいたかわからない。が、暫くすると、切り燈台の火が、いつの間にか、少しずつ暗くなり出したのに気がついた。焔の先が青くなって、光がだんだん薄れて来る。と思うと、丁字のまわりが煤のたまったように黒み出して、追々に火の形が糸ほどに細ってしまう。阿闍梨は、気にして二三度燈心をかき立てた。けれども、暗くなる事は、依然とし

て変りがない。

それぱかりか、ふと気がつくと、灯（あかり）の暗くなるのに従って、切り燈台の向うの空気が一所（ひとところ）だけ濃くなって、それが次第に、影のような人の形になって来る。阿闍梨は、思わず読経（どきょう）の声を断った。――

「誰じゃ。」

すると、声に応じて、その影からぼやけた返事が伝って来た。

「おゆるされ。これは、五条西の洞院（とういん）のほとりに住む翁（おきな）でござる。」

阿闍梨（あざり）は、身を稍後（ややあと）へすべらせながら眸（ひとみ）を凝（こ）らして、

じっとその翁を見た。翁は経机（きょうづくえ）の向うに白の水干（すいかん）の袖を掻き合せて、仔細（しさい）らしく坐っている。朦朧（もうろう）とはしながらも、烏帽子（えぼし）の紐を長くむすび下げた物ごしは満更（まんざら）狐狸（こり）の変化（へんげ）とも思われない。殊に黄色い紙を張った扇を持っているのが、灯（あかり）の暗いにも関らず気高（けだか）くはっきりと眺められた。

「翁（おきな）とは何の翁じゃ。」

「おう、翁とばかりでは御合点（ごがてん）まいるまい。ありようは、五条の道祖神（さえのかみ）でござる。」

「その道祖神が、何としてこれへ見えた。」

「御経を承（うけたま）わり申した嬉しさに、せめて一語（ひとこと）なりと

も御礼申そうとて、罷(まか)り出(いで)たのでござる。」

阿闍梨は不審らしく眉をよせた。

「道命(どうみょう)が法華経を読み奉るのは、常の事じゃ。今宵に限った事ではない。」

「されば。」

道祖神(さえのかみ)は、ちょいと語を切って、種々(しょうしょう)たる黄髪(こうはつ)の頭を、懶(ものう)げに傾けながら不相変(あいかわらず)かすかな声で、

「清くて読み奉らるる時には、上(かみ)は梵天帝釈(ぼんてんたいしゃく)より下(しも)は恒河沙(こうがしゃ)の諸仏菩薩まで、悉(ことごと)く聴聞(ちょうもん)せらるるものでござる。よって翁は下賤(げせん)の悲しさに、御身(おんみ)近うまい

る事もかない申さぬ。今宵は――」と云いかけながら、急に皮肉な調子になって、「今宵は、御行水も遊ばされず、且つ女人の肌に触れられての御誦経でござれば、諸々の仏神も不浄を忌んで、このあたりへは現ぜられぬげに見え申した。されば、翁も心安う見参に入り、聴聞の御礼申そう便宜を、得たのでござる。」

「何とな。」

道命阿闍梨は、不機嫌らしく声をとがらせた。

道祖神は、それにも気のつかない容子で、

「されば、恵心の御房も、念仏読経四威儀を破る事なかれと仰せられた。翁の果報は、やがて御房の堕獄の

悪趣と思召され、向後(こうご)は……」

「黙れ。」

阿闍梨は、手頸(てくび)にかけた水晶の念珠をまさぐりながら、鋭く翁の顔を一眄(いちべん)した。

「不肖ながら道命は、あらゆる経文論釈に眼(まなこ)を曝した。凡百(ぼんびゃく)の戒行徳目(かいぎょうとくもく)も修せなんだものはない。その方(ほう)づれの申す事に気がつかぬうつけと思うか。」——が、道祖神(さえのかみ)は答えない。切り燈台のかげに蹲(うずくま)ったまま、じっと頭を垂れて、阿闍梨の語(ことば)を、聞きすましているようである。

「よう聞けよ。生死即涅槃(しょうじそくねはん)と云い、煩悩即菩提(ぼんのうそくぼだい)と云う

は、悉く己(おの)が身の仏性(ぶっしょう)を観ずると云う意(こころ)じゃ。己が肉身は、三身即一の本覚如来(ほんがくにょらい)、煩悩業苦(ごうく)の三道は、法身般若外脱(ほっしんはんにゃげだつ)の三徳、娑婆(しゃば)世界は常寂光土(じょうじゃっこうど)にひとしい。道命は無戒の比丘(びく)じゃが、既に三観三諦即一心(さんかんさんたいそくいっしん)の醍醐味(だいごみ)を味得(みとく)した。よって、和泉式部(いずみしきぶ)も、道命が眼(まなこ)には麻耶夫人(まやふじん)じゃ。男女(なんにょ)の交会も万善(ばんぜん)の功徳(くどく)じゃ。われらが寝所には、久遠本地(くおんほんじ)の諸法、無作法身(むさほっしん)の諸仏等、悉く影顕(えいげん)し給うぞよ。されば、道命が住所は霊鷲宝土(りょうじゅほうど)じゃ。その方づれ如き、小乗臭糞(しょうじょうしゅうふん)の持戒者が、妄(みだり)に足を容(い)るべきの仏国でない。」

こう云って阿闍梨は容(かたち)をあらためると、水晶の念

珠を振って、苦々(にがにが)しげに叱りつけた。

「業畜(ごうちく)、急々に退(の)き居ろう。」

すると、翁(おきな)は、黄いろい紙の扇を開いて、顔をさしかくすように思われたが、見る見る、影が薄くなって、蛍(ほたる)ほどになった切り燈台の火と共に、消えるともなく、ふっと消える――と、遠くでかすかながら、勇ましい一番鶏(いちばんどり)の声がした。

「春はあけぼの、ようよう白くなりゆく」時が来たのである。

（大正五年十二月十三日）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年9月24日第1刷発行
1995（平成7）年10月5日第13刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
1998年11月11日公開
2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。